

## ■ 修士論文要旨

# 権力を振るう既存報道機関

## — 現代日本におけるマスメディアの役割とニューメディアとの対立 —

The powerful pre-existing news organs and it's new challengers.

— Where old and new media collide in contemporary Japan. —

神奈川大学大学院 経営学研究科

国際経営専攻 博士前期課程

梶 山 翔 太

NARAYAMA, Shota

## ■ キーワード

権力、マスメディア、ニューメディア、対立構造、選択と信念

本論文は、権力を振るう既存報道機関、現代日本におけるマスメディアの役割とニューメディアとの対立と題し、現在の日本で大手報道機関マスメディアから流れてくる情報が、日本の社会を強制的に抑圧している可能性があることを指摘していくものとする。その上で今後、報道機関マスメディアがどのような道筋を辿っていくかを筆者なりに展望していく内容である。「当為」の内容を含み、筆者のマスメディアに対する考えを、先行研究を参考に書いていくものとする。しかしながら、膨大な量の先行研究すべてに精通しているわけではない。多少乱暴で粗悪な論調になり、学術論文という枠組みから著しく逸脱してしまっている部分が多々ある。未熟で拙い文章になってしまいがちになり心苦しいが、筆者なりの熱意と受け取っていただければ幸いである。

本研究を行っていく中で、様々な疑問が浮上し、当初この主題を決めたときと現在では問題の焦点とする部分が違っており、主題と本文が一致していないきらいがある。乱暴な論調に加え、内容ま

でもズレが生じ、不甲斐なさでいっぱいだが、筆者なりの感受性の成長とご容赦願いたい。

1章では、既存報道機関、マスメディアの構造と題し、本テーマの権力を振るう既存報道機関とはどういうことなのか、テーマ設定の裏付けとなるマスメディアのもつ権力について展開していく。2011年に発生した東北大震災を例に挙げ、マスメディアに対する不信感を検討し、ジャーナリズムの観点から、検討した。

2章ではニューメディア、すなわちネットメディアの優位性を検討し、ネットのもつ権力、さらに1章の比較としてネットメディアのジャーナリズムを論じた。これによって本テーマの主題である対立構造につなげることが可能となった。

3章は、マスメディアとネットメディアの役割と題し、マスメディアとネットメディアの対立構造を中心に検討した。しかし結果として対立構造を論じるよりも、なぜ対立の構造になっているのかを、社会におけるメディアの役割と、メディアを利用している受け手側を筆者の主観を中心に検

討し、論じるものとした。

4章での最後のまとめは、本論文の総括というよりも、研究を通して筆者が感じたことを、赤裸々に書くものとした。これによって、筆者の研究過程における、新たな問題意識の芽生えを感じ取っていただけるだろう。

本研究テーマを通して行き着いたのは、マスメディアとネットメディアが対立しているという構図は、ネットメディアの総意が、マスメディアを突き動かす、ということであり、ネットメディアとマスメディアをどのように利用するのかは、個人の選択に委ねられているということである。つまり役目として、メディアがツールである以上、それを受け手側がどのように利用するかが、問われているということである。そしてメディアを通じて、どのようなアクションを起こすかは、個人の観念に依るところであろう。

個人の観念、つまり社会に生きる一人一人の感性や信念が、常に問われていく時代に移り変わってきたということである。それはメディアの利用にかかわらず、様々な事柄において、選択の幅が広がったということであろう。何を以て信念とするのかは、一人一人の経験から抽出された習慣や、周囲の環境、人との出会い、社会に対する正義感等々で多種多様に存在する。信念を貫くときに必要なことは明確な意思表示と、意志を貫く勇気を持たねばならないということである。ときには信念同士が衝突するかもしれない。信念同士がぶつかり合い、摩擦が起こり、せめぎ合い、でっばった部分同士が削り落とされる。そうした一連の過程の中で、常に人々の中で渦巻いているのは「選択」という言葉であり、その選択によって選んだ道に、信念を上乗せして顕在化していく。そのようなプロセスを繰り返すことによって、一つの不格好で個性的で純粋な結晶が生まれる。その結晶は、その人の中で蓄積された時間も含意し、また脆く、その色はその時々によって変わり、硬度も光度も種々であろう。しかしその結晶こそ、その人自身の生み出した、他の人にはない世界でたっ

た一つの確固たる自分である。その結晶を切磋琢磨していくことが、現在進行形で、社会に生きる人々にもっとも必要な喫緊事項であると感じるのである。

選択と信念、この二つの言葉が今後の社会におけるキーワードになるだろうというところが、本テーマの最大のキモである。これから先、メディア媒体にかかわらずさまざまな技術が生まれ、さまざまなツールが出てくるであろう。そのときに、どのような目的でもって選択し、信念を貫くのか、問われ続けることになる。そのことが、その人の生き様につながることになるだけでなく、その人が生きる社会にも反映されることになることと信じて疑わない、というところで、本研究を締めくくるものとしたのである。